コラム

エイムズ唯子の「心理学の周辺」

第 11 回：「ゴトー君とイノセさん」の巻

父宛のその電話は季節を問わず、時々かかってきていたはずです。でも、思い出されるのは寒い冬の夜のこと。電話の主は、「ゴトー君」という若い男の人でした。ゴトー君からの電話が特別だったのは、とてもとても、とても長い電話だったからです。

母からは聞いていました。ゴトー君は、父が養護学校にいたころの教え子だということ。筋ジストロフィーという病気で、だんだんと身体に力が入らなくなって、普通の人より早く死んでしまうのだということ。昭和５０年代の話です。家の黒電話は、板張りの玄関にありました。薄いスリッパの底ごしに、父はしんしんと冷えながら、ゴトー君のおしゃべりに、いつまでも耳を傾けていました。

時は移って、昨年 12 月 22 日の朝。私は、大学へ車を走らせながら、ゴトー君のことを思い出していました。その日、私が担当する「障害の理解」の授業に、筋ジストロフィーの当事者であるイノセさんがゲスト講師として来てくださることになっていたからです。イノセさんは、ファミリッシュという介助者のグループの手を借りながらさいたま市で自立生活をし、ドキュメンタリー映画に出たり、講演活動をされたりしています。

大学では、授業の内容に応じて、外部からゲスト講師をお招きすることがありますが、イノセさんの講義は、すこし異色です。ファミリッシュの介助メンバーのなかに、二級建築士さんや、音響技術を持った方がいらっしゃるので、会場となる教室には特製の組み立て式ポータブル演台が設置され、床にはスピーカーケーブルが走り、ミキサー、照明器具なども運び込まれて、ちょっとしたバンドのコンサートもできそうな「舞台」が用意されるのです。

ファミリッシュのプロデュースによるイノセさんの講演は３回目でしたが、実は今回、ちょっとした問題が発生していました。時間割が変更になり、舞台設営のためのまとまった時間が確保できなくなってしまったのです。正直なところ、私はお腹のなかで考えていました。今年は、簡単なセッティングでいいのではないかと。舞台がなくても、講義には問題ないはずでは、と。でも、ファミリッシュからのお返事は「朝９時から設営させてください。なるべくご迷惑にならないようにします！」

午後３時。電動車椅子を操って、イノセさんが BGM をバックに登場です。家族同様に信頼する仲間たちの手作りの舞台の上で、一人暮らしをしたきっかけ、生活の様子、そして今の心境を学生たちに語りかけるイノセさんの表情は、明るくやわらかく、落ち着いていました。イノセさんにとって、高さ 30 センチの舞台は、世界に自分の声を届けるための、なくてはならない 30 センチだったのです。

最近、ある方に教わりました。黒電話は、電気を使わないため、災害に強い通信手段なのだそうです。ゴトー君と父をつないでいた黒電話は、もうすっかり見かけなくなりましたが、雨にも風にも不測の事態にも負けない、辛抱強く優しい黒電話の精神は、きっと忘れずにいようと心に誓った、クリスマスの３日前の出来事でした。

猪瀬さん（右）と、ファミリッシュの仲間で、同じく講演をして下さった岩出さん（左）のお２人と共に。

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）